

## 2021年度(令和3年度)十日町幼稚園自己評価

### 1、園の保育目標

キリスト教精神により愛と平和と人権を大切にした保育

1. キリスト教保育
2. 一人ひとりの育ちを大切にする保育
3. 生命の輝きを知る保育

大人の都合や価値観が優先され、これが良い教育だと錯覚されることが多い中、「遊ぶこと、甘えること、愛されること」など、本来子どもが最も必要としていることを大切にしています。今受ける愛が人生の輝きの源になる、これが私たちの保育です。

### 2、本年度に定めた重点的に取り組むことが必要な目標や計画をもとに設定した園の評価の具体的な目標や計画

- ①子どもたちが受容的・応答的対応を受けて、安心して幼稚園での生活を送るようにする。
- ②礼拝や誕生会や日々の生活を通して、自己肯定感（自尊感情）を身につける。
- ③子ども自身が遊びや生きた体験学習を通して自発性・自主性を高める。
- ④ケンカなどのぶつかり合いや共通理解されたルールのある日々の生活を通して、友だちと共に遊び、生活することを喜び、主体的かつ意欲的に取り組む。
- ⑤発達段階をとらえ、見通しをもって保育する。
- ⑥保育者、栄養士、看護師、園長が、それぞれに連携して保育・運営していく。
- ⑦日々の生活を通して、子どもと保育者、保護者と保育者が信頼関係で結ばれること。
- ⑧食事への意欲を養い、共に食卓を囲む喜びを体験する。
- ⑨地域社会の中の保育園として、地域に開かれた保育園として地域住民との交流をより促進する。

### 3、評価項目の達成及び取組状況

評価項目	現 状 分 析
①子どもたちが受容的・応答的対応を受けて、安心して生活し、いきいきしているか	特に未満児は愛着形成を大切にするために担任が0歳から2歳までの3年間は担任が持ち上がり、またゆるやかな担当制をとることで子どもの思いを受け止められた。3歳以上児もそれぞれが言葉で自分の気持ちを表現し、それをゆったりとした気持ちで受け止めることが出来ている。
②子どもたちの自己肯定感（自尊感情）が育っているか	多くの子どもが自信をもって過ごしている様子が見られる。ただ満たされない気持ちを抱えて登園する子どもや支援を要するご家庭の子どもに不安定な様子が見える時もある。
③子どもたちの遊びを通して自発性・自主性を発揮し、また保育者が子どもたちにとってよき援助者となりえているか	子どもたち自身が好きな遊びを見つけ、以上児になると子どもたち同士でその遊びを発展させている様子が見える。保育者は子どもの思いをくみ取りながら援助しているが、心にゆとりがない時に環境設定や準備等が足りていない時がある。
④子どもたちが日々の関わり合いの中で、友だちと共に過ごすことに喜び、主体的かつ意欲的に過ごしているか	その年齢にあった育ちがみられる。特に4、5歳児は友だちとの関わりの中で、創意工夫を重ねて遊んだり、行事の準備を心待ちにしながら共に楽しむ姿が多くみられた。また学年を越えて遊ぶ中で、年上の子どもが年下の子どもの面倒をよくみていた。
⑤発達段階をとらえ、見通しをもって保育しているか	3歳児未満児はもちろんのこと、3歳児であったも個別の育ちを大切にしながら保育することが出来た。そのうえで、子どもたち同士で育ちあう姿が4歳児以上になってより見えるようになってきた。
⑥保育者、栄養士、看護師、園長が、それぞれに連携して保育・運営しているか	報告・連絡・相談は以前と比べるとより連携できるようになってきている。栄養士と保育者の連携はより丁寧に密接にかかわることが求められる。
⑦子どもと保育者、保護者と保育者の間に信頼関係が結ばれているか	日々の受容的・応答的態度で保育を行い、特に未満児は愛着形成を十分に配慮するため、ゆるやかな担当制を導入し、子どもと保育者の信頼関係は構築されていると思う。保護者とも基本的な信頼関係はできていると思うが、一部意識のズレが生じた時があったので、より丁寧な声掛けや連絡が必要である。
⑧食事への意欲が育ち、共に食卓を囲む喜びを子どもたちが感じているか	食への意識は個々人の差が大きく、意欲的に食べる子と食べることに執着しない子に分かれる。調理の工夫は十分になされているので、子どもたちが食べることに集中できる環境を整えていくことが求められる。
⑨地域にある園として地域に開かれ、地域住民との交流が図られているか。	新型コロナウイルスの流行が続き、園としての具体的な交流はないが、地域住民の方が園の運営を覚えて声をかけてくださったり、職員一人ひとりの名前を覚えてくださっていて日々ささやかな交流が出来ていることは良いことだと思う。

#### 4、評価項目の取組をより深めるために保育者がどのように対応するのか

評価項目		保育者がどのように対応するのか
①子どもたちがいきいきして過ごすために	⇒	保育者一人ひとりが子どもの思いをしっかりと受け止め、興味を持ったことや遊びに集中して取り組めるように援助していく。
②子どもたちの自己肯定感（自尊感情）が育つために	⇒	子どもたちのありのままの姿を受け止め、求められることについては受容的・応答的態度で接する。子どもたち自身が「受け入れられ、認められている」と感じる関わりをもつ。
③保育者が子どもたちにとってよき援助者となるために（環境設定や保育準備を含む）	⇒	子どもたちが何に関心・興味を持っているか、どのような思いをもって日々過ごしているのか、常にアンテナをはって教材準備と環境設定を行い、予定を立て準備していく。
④子どもたちが友だちと結びつき、主体的かつ意欲的に取り組むために	⇒	遊びを発展させるための玩具や教材の準備が必要。数や量は年齢に応じて必要な設定を行う。また年長児はクラス単位で話し合いを行って子ども同士の意見を出し合い集約する。
⑤発達段階をとらえ、見通しをもって保育するために	⇒	保育所保育指針は全員でいつも共有し、原点に立ち返る意味でも常に確認する。一方で園児一人ひとりの記録も見かえし、その子自身の育ちを十分に踏まえることで見通しをもった保育が展開できるようになる。
⑥保育者、栄養士、看護師、園長が、それぞれに連携して保育・運営するために	⇒	疑問に感じたことや不安に思ったことはすぐに共有する。特に同じ空間にいることの少ない調理スタッフ（栄養士含む）との声掛けはマメに行っていく。
⑦子どもと保育者、保護者と保育者の間に信頼関係が結ばれるために	⇒	子どもとの信頼関係はよくできているので、引き続き一人ひとりの育ちを肯定的にみていく。保護者の方は子育ての大切なパートナーであるので、上から目線にならず、保護者の方々の仕事等の日々のご苦勞を想像し共感しつつ、子どもの育ちのためのご協力をこれからも丁寧をお願いしていく。
⑧食事への意欲と、共に食卓を囲む喜びを実感するために	⇒	食事の時間が楽しみになるような肯定的なかかわりや、食事に集中的できる環境を全体で工夫していく。
⑨地域に開かれ、地域住民と交流を図るために	⇒	子どもたちや職員との個人的な人間関係はすでにできている。あとはコロナ後に触れ合う機会が持てるとよい。

## 5、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
職員同士の保育理念・保育実践の共有をより深く	保育の行い方、準備・環境設定の仕方などを細やかなところで共通理解を深めていく。また個々人の研修報告を共有する場をもち、また職員会時に行っている保育に関する文章の読み合わせなどを重ねて保育理念と保育実践の共有をより深めていく。
行事のあり方について	コロナ禍で行事の変更を余儀なくされたが、コロナ前に行っていた行事を単に復活させるのではなく、より子どもたちの育ちや気持ちの安定と向上に資する行事のあり方を模索していく。今年度行った誕生会のあり方は簡易的になった部分もあるが、保護者の参観ではなく、参加型になったのは良かった。
与えられた環境の中でより工夫した保育を	決して広いお部屋があるわけではなく、雪国であるがゆえに外遊びがなかなかできない時期もあるが、与えられた環境の中で何ができるかを考え、そして礼拝堂や園外での遊びも含めて、園内だけでなく園外も保育の場であると考えて保育実践を積み重ねていく。
保護者の方への発信	保育所は単なる託児所ではなく、子どもたち一人ひとりを理解し、肯定的に受け止め、そして各児がもっている力を育む場所であることを保護者に理解してもらい、同時に保育所の職員は子どもを育てるパートナーであることを自覚していただくことにより注力したい。おたよりや連絡帳などで子どもの育ちを共有しているが、保護者の方でもかなり細かく反応いただける方と、ほとんど連絡帳に記述の無い方もいる。その場合は、登降園時に意識的に保育者が声掛けをしていき、信頼関係を深めていくことが大切である。また保護者の方と子どもたちとの関係において、アタッチメント（愛着形成）に課題がある場合が引き続き見られる。気になる保護者ほど上から目線での対応にならず、保護者の思いを十分に受け止めつつ、子どものために気を付けていただきたい点を「お願いベース」で声掛けをしていく。